

『清浄道論』に挿入された目連の竜王退治物語

—ナンドーパナンダ（ナンダウパナンダ）の調伏—

The Taming of the Royal Nāga Nandopananda:
A Story Interpolated in the *Visuddhimagga*

林 隆 嗣

HAYASHI, Takatsugu

Abstract

The *Visuddhimagga* (*Vism*) composed by Buddhaghosa, the most eminent commentator in Theravāda Buddhism, is undoubtedly an essential text to comprehend the Theravādin's aspect of the Buddhist philosophy and practice. In the chapter 12 of the *Vism*, surveying various kinds of the supernormal powers, Buddhaghosa quotes the Canonical description that the one with the power touches the moon and sun, and he introduces an interpretation by the elder Tipiṭaka-Cūlanāga (contemporary with the king Kūṭakaṇṇatissa, reigned 41-19 BC) that this power physically enlarges one's hand. Here, Cūlanāga refers to the story called "Nandopanandadamana" relating a psychic duel between the royal nāga Nandopananda and Mahā-Moggallāna, one of the chief disciples of the Buddha. The textual evidence shows that this story was not only known to the monk in the 1st century BC, but also commonly accepted among the Theravādins still in the 5th century AD. The *Nandopananda[damana]*, explicitly recognized in the *Vinaya* commentary as one of the *dhammas* "which were not listed in the three councils", even exists in the Tibetan and Chinese translations. This fact throws a new light on the study of apocryphal literature of Pāli Buddhism as well as on the study of source materials of the Pāli commentaries.

キーワード：パーリ註釈文献、ブッダゴーサ、正典・外典、仏語、アッタカター

1. はじめに

紀元5世紀のスリランカで活躍したブッダゴーサ (Buddhaghosa) は、『清浄道論』 (*Visuddhimagga* = *Vism*) を著して上座部仏教大寺派の修道論を体系的に整理し、教団の思想基盤を確立した大註釈家である。この作品は、聖典三蔵を直接註釈するパーリ註釈文献群 (アッタカター) に先行するものであり、それらの内容と形式に深く関係することから、アッタカターの解釈法や資料成立史を検討する際のメルクマールに位置づけられる。そのため、当時の上座部教団の思想的・文献的様相を解明する基礎作業としてこれまで多くの研究者によって *Vism* の資料背景が調査されてきた。

まず、*Vism* の内容構成が『解脱道論』に基づくことは、[Nagai 1919][長井 1919/1975]による発見、および[Bapat 1937][水野 1939/1996]の比較研究によって判明した。*Vism* の Pali Text Society 版校訂テキスト (Ee) は、聖典三蔵

を中心とする源泉資料のリストを掲載している¹⁾。*Vism* を含むパーリ註釈文献を対象にして、古註釈 (シーハラ・アッタカター) の引用状況や内容の検討を最初に試みたのは、[Adikaram 1946/1994]である。[Lottermoser 1982]は、ブッダゴーサに帰せられる文献群での引用詩偈を詳細に調査した。[森 1984]²⁾は、すべてのパーリ註釈文献からシーハラ・ソースと考えられる資料名と人物名とを収集し、失われた古註釈の解明とそれらの中心年代の特定を試みた。森の広範かつ綿密な調査が礎となってパーリ註釈文献研究という新しい扉が開かれたといっても過言ではない。

筆者は、これまで森の業績に代表される先行研究をふまえながら再調査や新資料の発見によって註釈文献の源泉資料の解明を進めてきた³⁾。本稿では、*Vism* における神通力の解釈をめぐる議論とそこに挿入された竜王退治物語を検討し、看過されてきた正典外文書を解明するための手がかりの一つとしたい⁴⁾。

2. 太陽や月に触れる神通力

— 肉体は巨大化するか —

仏教では修行を重ねてある段階にいたると、パーリ語で *abhiññā*, *iddhi*, *pāṭihāriya* などと呼ばれる特殊能力 (神通、神変、奇跡) が身につくとされる⁵⁾。パーリ聖典では修行過程の付随的成果として、奇術や忍術のような分身、透身、壁抜け、空中浮遊、また千里眼、念力、テレポート、テレパシーのような超能力に類するものまで考察されてきたが、*Vism* 第12章では、古くから知られる *abhiññā* の5分類 (または6分類) に加え、この5分類の第1である *iddhividhā* (神通力の類) をさらに細分化した10種を詳細に定義解説する。この十神通 (神変) の第1に挙げられる「思いを定めること (決意、加持) [の結果] としての神通 (*adhittānā*⁶⁾ *iddhi*)」は、さらに10種に分類されるが、その第9番目に「日月把触神変」というものがある。神通の分類自体は *Dīghanikāya* (DN) などに見られるが、後期の聖典 *Paṭisambhidāmagga* (*Paṭis*) は次のように説明する。

「これほど強大な神通力をもち、これほど大きな威力をもつ、この月や太陽ですら、[彼は]手でつかんで、なで回す」(DN I.78) という、この場合、彼は神通力を有して心による支配力に達している者であって、坐っていたり、あるいは寝転んだりした状態で、月や太陽に思念を傾ける。思念を傾けてから、智によって思いを定める、「手の届く範囲⁷⁾に生じろ」と。[すると]手の届く範囲に生じる。彼は坐っていたり、あるいは寝転んだりした状態で、月や太陽を手で触ってつかんでなで回す。例えば、人々があるのままの状態でも神通力も有さずに、何であれ姿あるものを手の届く範囲で触ってつかんでなで回すのとまったく同じようになしかたで、彼は坐っていたり、あるいは寝転んだりした状態で、月や太陽を手で触ってつかんでなで回す。⁸⁾

上の記述に従えば、これは月や太陽を手元に出現させて触る超絶的能力を意味する神変だが、ブッダゴーサは同じ箇所を引用 (*Vism* xii. 103) したうえで、①みずから日月に赴いて (*gantvā*)、②手元に出現させて、③手を増大させて (*hattham vadḍhetvā*)、という3つの方法でなされると解説し直す。このような拡大解釈は、先行するアバヤギリ派文献『解脱道論』⁹⁾に見られないことから、上座部大寺派で形成されたと推測できる。

ただし、下に検討するように、③の解釈をめぐる長老や比丘たちの中で異論が生じたことをブッダゴーサ本人が証言しているため、聖典 *Paṭis* の記述と異なる方法の

付加は *Vism* の (ブッダゴーサ個人の) 新機軸ではなく、古伝承に由来することが明らかである。さらに、直前の第8「飛行神変」や第5「不障壁神変 (壁抜け)」の解釈については、紀元前1世紀のスリランカで活躍した三蔵チューラアバヤ長老 (*Tipiṭaka-Cūḷābhayātthera*)¹⁰⁾による疑義 (*Vism* xii. 89, 101 [Ee 394, 397]) が紹介されている。このように、客観的に検証や論証ができない超能力現象は、想像されるイメージと教義のとらえ方に左右されて、古くから教団内部で解釈が多様化していたと考えられる。

さて、上記③の方法について意見が分かれるのは、肉体の一部である腕 (*upādāṇa*、生体) がそのまま伸びるのか、それとも実際の腕を根拠にしつつも架空の腕 (*anupādāṇa*、非生体) を造作するのかという点である。ゴム人間か巨大マジックハンドか。ブッダゴーサは、ここで後者を支持する一方で、前者を主張する三蔵チューラナーガ長老 (*Tipiṭaka-Cūlanāgātthera*)¹¹⁾の説を紹介する。

その際、チューラナーガ長老の論拠として示されるのが「ナンドーパナンダの調伏 (*Nandopanandadamaṇa*)」という物語である。その内容は、ブッダと弟子たちが天界を訪問する途中、ナンドーパナンダという名の竜王 (*nāgarāja*、神秘的コブラ族の長) の怒りに触れて妨害を被るが、「神通第一」と称揚されるマハー・モッガッラーナ (大目犍連、目連) が神通力を駆使して竜王を翻弄し、最後に仏教に帰依させるというものである。そのなかで、須弥山を7重巻きにして空を覆う竜王に対抗し、モッガッラーナ自身もさらに巨大に変身して14重に絡みつく壮大なシーンがある。チューラナーガ長老はこの事例と関連させてリアルな肉体変化が起こると理解する。

「ナンドーパナンダの調伏」は、ダンマパーラ作『長老偈註』(Th-a) や作者不詳の『譬喩偈註』(Ap-a) においてモッガッラーナの詩を註釈する際にも再録されていることから、パーリ註釈の時代にはよく知られ、好まれて語られていたようである。ブッダと仏弟子の伝記を内容とするこの物語の「外典」としての位置づけやその文献的価値の検討、さらにチベット語訳された上座部系護呪經典群のなかにも存在するという事実と他部派での伝承や普及などを視野に入れた考察については別の機会に行う予定にしている。ここでは、それらに先立って研究の基盤となるテキスト (*Vism* xii. 106-116 [Ee 398-401], Th-a III. 177-179 = Ap-a 248-250)、和訳と訳注を示しておく。

3. 「ナンドーパナンダの調伏」

— テキスト、和訳と訳注

本稿で使用した *Vism*、Th-a、Ap-a のテキストは以下の通り (1 を底本とする)。

1. *Visuddhimagga of Buddhaghosācariya*, ed. by Henry Clarke

- Warren, revised by Dharmananda Kosambi, Harvard 1950. (= Vism, HOS)
2. *The Visuddhi-Magga of Buddhaghosa*, ed. by C.A.F. Rhys Davids, London 1920 (I), 1921 (II), reprinted in one volume 1975. (= Vism, Ee)
3. *Buddhaghosācariya's Visuddhimaggo with Paramatthamañjūsātīkā of Bhadantācariya Dhammapāla*, ed. and revised by Rewatadhamma, Varanasi 1969 (I, II), 1972 (III). (= Vism, Ne; Vism-mht)
4. *Paramatthamañjūsā Visuddhimaggamahāṭīkā*, Bangkok (The Bhūmibalo Bhikkhu Foundation Press) 1985 (I, II, III). (= Vism-mht, Se)
5. *Paramatthadīpanī Theragāthā-aṭṭhakathā*, ed. by F.L. Woodward, London 1959. (= Th-a)
6. *Visuddhajanavilāsini nāma Apadānatthakathā*, ed. by C.E. Godakumbura, London 1954. (= Ap-a)

以下、底本の Section 番号、テキスト原文、和訳の順に記す。Vism-mht (3 を底本とする) で註釈されている語句をイタリック (和訳には下線) で示し、本稿末の注にその訳を付す。

106. ekasmiṃ kira samaye Anāthapiṇḍiko gahapati bhagavato dhammadesanaṃ sutvā sve, bhante, pañcahi bhikkhusatehi saddhiṃ amhākaṃ gehe bhikkhaṃ gaṇhathā ti nimantetvā pakkāmi. bhagavā adhivāsetvā taṃ divasāvasesaṃ rattibhāgaṃ ca vītināmetvā paccūsasamaye dasasahasilokadhātum *olokesi*. ath' assa*¹ Nandopanando nāma nāgarājā nānamukhe āpātham āgañchi.

*¹ Th-a, Ap-a: oloketassa.

106. 伝え聞くとところによると、ある時、家長であるアナータピンディカは幸いな方 (世尊) の教法の説示を聞いてから、「あなた様 (尊者よ)、明日、500 人の比丘たちと一緒に私どもの家で施食を受けてください」と、招待して立ち去った。幸いな方は受け入れ、その日中の残り [時間] と夜分とを過ごして¹²⁾、朝早い時間に一万世界を眺めた¹³⁾。このとき、ナンドーパナンダという名の竜王が、この方 (世尊) の智の向かう先における領域 (認識の働く範囲) に入って来た¹⁴⁾。

107. bhagavā, ayaṃ nāgarājā mayhaṃ nānamukhe āpātham āgacchati, atthi nu kho assa upanissayo*¹ ti āvajjanto*², ayaṃ micchādīṭṭhiko tīsu ratanesu *appasanno* ti disvā, *ko nu kho imaṃ micchādīṭṭhito viveceyyā* ti āvajjanto*¹ Mahā-Moggallānattheraṃ addasa. tato pabhātāya rattiyā sarīrapaṭṭijaggaṇaṃ katvā āyasmantaṃ Ānandaṃ āmantesi, Ānanda, pañcannaṃ bhikkhusatānaṃ ārocehi, tathāgato devacārikaṃ gacchati ti.

*¹ Th-a, Ap-a: kin nu kho bhavissatī. *² Ee, Ne: āvajjento.

107. 幸いな方は、「この竜王が私の智の向かう先における領域に入って来ている。一体、この者に機根 (資格、条件、素地) があるかどうか」と注意を傾け (熟慮) しながら、「この邪に見る者 (竜王) は3つの宝 (仏法僧) について心を澄ませせていない」と見てから、「一体、誰がこの者を邪に見ることから切り離すことができるだろうか¹⁷⁾」と注意を傾けながら、マハー・モッガッラーナ長老を見た。それから、夜が明けて¹⁸⁾、身づくろいを行なってから¹⁹⁾、尊者アーナンダに命じた。

「アーナンダよ、500 人の比丘たちに告げなさい、『如来が神々への参詣 に行かれます』」と。

108. *taṃ divasaṃ* ca Nandopanandassa *āpānabhūmiṃ sajjayimsu*. so dibbaratanapallaṅke dibbena setacchattena dhāriyamānena*¹ *tividhanāṭakehi c'eva* nāgaparīsāya ca parivuto dibbabhājanesu upatthāpitaṃ annapānavidhiṃ*² *olokayamāno* nisinno hoti. atha bhagavā, yathā nāgarājā passati tathā katvā tassa vitānamatthaken'eva pañcahi bhikkhusatehi saddhiṃ Tāvatiṃsadevalokābhimukho pāyāsi.

*¹ Ee: dhāriyamānena. *² Ee: upatthāpita-annapānavidhiṃ.

108. しかし、その日に²¹⁾、ナンドーパナンダのために飲み会の席を [竜たちが] 準備していた²²⁾。彼は、神々しい宝石のソファのうえで、神々しい白い傘を支え持っている者と、他ならぬ3種のダンサーたちと²³⁾、竜の会衆とに囲まれて、神々しい容器どもに用意された食べ物と飲み物の支度²⁴⁾を眺めながら²⁵⁾坐っていた。さて、幸いな方は、竜王が [世尊] 見るようになして、彼の天蓋の真上を通過して、500 人の比丘たちと一緒に三十三天という神々の世界に向かって出発していた。

109. tena kho pana samayena Nandopanandassa nāgarājassa evarūpaṃ pāpakam ditthigataṃ uppannaṃ hoti: ime hi nāma*¹ muṇḍakā samaṇakā amhākaṃ uparūpari bhavanena devānaṃ Tāvatiṃsānaṃ bhavanaṃ pavisanti pi nikkhamanti pi; na dāni ito patthāya imesaṃ amhākaṃ matthake pādapaṃsum*² okirantānaṃ gantaṃ dassāmī ti utthāya Sinerupādaṃ gantvā taṃ attabhāvaṃ vijahitvā Sineruṃ sattakkhattuṃ *bhogehi* parikkhipitvā upari phaṇaṃ*³ katvā Tāvatiṃsabhavanaṃ *avakujjena**⁴ phaṇena *gahetvā* adassanaṃ gamesi.

*¹ HOS, Ee: nama. *² HOS: -su. *³ Ee: upariphaṇaṃ.

*⁴ Ee: avakujje (see CPD, s.v.).

109. しかし、その時、竜王であるナンドーパナンダには次のような悪辣な [邪] 見に陥った状態が生じていたのだ。

「まさしく禿げ小僧でえせ沙門のこいつらが、わたらの宮殿 (居場所) の上を次々に²⁶⁾通過して、三十三天なる神々の宮殿に入ったり出たりするのだな。今やもうこの先は、

こいつらがわしらの頭上に足埃を撒き落としながら行くのを[わしは]容赦せん」と。

[竜王は]立ち上がり、シネール(須弥山)の麓に行つて、その自己存在(身体)を捨て去って、シネールを7回とぐる(pl.)で巻きついて、鎌首を上にしてから、下に曲げた鎌首で三十三天の宮殿をとらえて²⁷⁾見えない状態²⁸⁾に向かわせた。

110. atha kho āyasmā Raṭṭhapālo bhagavantam etad avoca: pubbe, bhante, imasmim padese ṭhito Sinerum passāmi, Sineruparibhaṇḍam passāmi, Tāvatiṃsam passāmi, Vejayantam passāmi, Vejayantassa pāsādassa*¹ upari dhajam passāmi. ko nu kho, bhante, hetu, ko paccayo yaṃ etarahi n' eva Sinerum passāmi ... pe ... na Vejayantassa pāsādassa*² upari dhajam passāmī ti? ayam, Raṭṭhapāla, Nandopanando nāma nāgarājā tumhākam kupito Sinerum sattakkhattum bhogehi parikkhipitvā upari phaṇena pañicchādetvā andhakāram katvā ṭhito ti. damemi nam, bhante ti. na bhagavā anujāni. atha kho āyasmā Bhaddiyo, āyasmā Rāhulo ti anukkamena sabbe pi bhikkhū utṭhahimsu. na bhagavā anujāni.

*¹ Th-a: Vejayantapāsādassa. *² Ee: Vejayantapāsādassa.

110. そこで、尊者ラッタパーラは幸いな方に次のことを話したのだ。

「あなた様、先ほどは、この場所に立って[私は]シネールを見ていました。シネールの周壁を²⁹⁾見ていました。三十三天を見ていました。ヴェージェヤンタ(三十三天にある帝釈天の楼閣)を見ていました。ヴェージェヤンタ楼閣の上にある旗を見ていました。あなた様、一体原因は何なのですか、きっかけは何なのですか³⁰⁾。いまシネールがまったく見えないのは、…(中略)…ヴェージェヤンタ楼閣の上にある旗が見えないのは」と。

「ラッタパーラよ、これは、ナンドーパナンダという名の竜王がお前たちに対して腹を立て、シネールを7回とぐるで巻きついて、上を鎌首でぐるりと覆って、暗闇にしているのです³¹⁾」と。

[[私が]調伏します、そいつを、あなた様」と。

幸いな方は承知しなかった。すると、尊者バツディヤ、尊者ラーフラと、順番に全員もの比丘たちが立ち上がった。[しかし]幸いな方は承知しなかった。

111. avasāne Mahā-Moggallānatthero, aham, bhante, damemī*¹ ti āha. damehi, Moggallānā ti bhagavā*² anujāni. thero *attabhāvam vijahitvā* mahantam nāgarājavanṇam abhinimminivā Nandopanandam cuddasakkhattum bhogehi parikkhipitvā tassa phaṇamatthake*³ attano phaṇam ṭhapetvā Sinerunā saddhim abhinippīlesi. nāgarājā padhūmāsi*⁴. thero pi*⁵ na tuyham yeva sarīre dhūmo atthi, mayham pi atthī ti padhūmāsi*⁴. nāgarājassa

dhūmo theram na *bādhati*, therassa pana dhūmo nāgarājānam*⁶ bādhati. tato nāgarājā pajjali. thero pi na tuyham yeva sarīre aggi atthi, mayham pi atthī ti pajjali. nāgarājassa tejo theram na bādhati, therassa pana tejo nāgarājānam*⁶ bādhati.

*¹ Ee: damemi nan; Ap-a: damemi. *² Th-a, Ap-a *add* nam.

*³ phaṇassa matthake. *⁴ HOS: padūpāsi, Ne: padhūmāyi; Th-a, Ap-a: dhūmāyi. *⁵ Th-a *omits*. *⁶ Th-a, Ap-a (former): nāgarājānam.

111. 最後にはマハー・モッガッラーナ長老が、「あなた様、私が調伏します」と言っている(pf.)。[[お前が]調伏しなさい、モッガッラーナよ」と、幸いな方は承知した。長老は、自己存在(身体)を捨て去って³²⁾、巨大な竜王の姿に化けて、ナンドーパナンダに14回とぐるで巻きついて、彼の鎌首の頭上に自分の鎌首を置いて、シネールと一緒に押し潰した。竜王は煙を吐き出した(吐き始めた)³³⁾。長老も、「お前だけの身体に煙があるのではない。私にもある」と煙を吐き出した。竜王の煙は長老を圧倒しないが、しかし、長老の煙は竜王を圧倒する³⁴⁾。それから竜王は燃え上がった。長老も「お前だけの身体に火があるのではない。私にもある」と燃え上がった。竜王の光熱力は長老を圧倒しないが、しかし、長老の光熱力は竜王を圧倒する³⁴⁾。

112. nāgarājā, ayam mam Sinerunā abhinippīletvā dhūpāyati*¹ c' eva pajjalati cā ti cintetvā, bho tvam ko 'sī ti paṭipucchi. aham kho, Nanda, Moggallāno ti. bhante, attano bhikkhubhāvena paṭiṭṭhāhi ti. thero tam*² *attabhāvam vijahitvā* tassa dakkhiṇakaṇṇasotena pavisitvā vāmaṇṇasotena nikkhami, vāmaṇṇasotena pavisitvā dakkhiṇakaṇṇasotena nikkhami; tathā dakkhiṇanāsotena*³ pavisitvā vāmanāsāsotena*³ nikkhami, vāmanāsāsotena*³ pavisitvā dakkhiṇanāsāsotena*³ nikkhami. tato nāgarājā *mukham vivari*. thero mukhena pavisitvā anto kucchiyam *pācīnena**⁴ ca *pacchimena* ca caṅkamati.

*¹ Cf. 111(*⁴). *² Ee *omits*. *³ Ee, Ne, Th-a, Ap-a: -nāsa-

*⁴ Ee: pacīnena; Ap-a: pācīnena.

112. 竜王は、「この者はわしをシネールとともに押し潰して、ひたすら煙を吐き、燃え上がっている」と思って、「貴殿よ、君は誰だ」と尋ね返した。

「ナンダよ、私がモッガッラーナなのだ」と。

「あなた様、[君は]自分の比丘の状態をもって元に戻れ」と。

長老はその(竜の姿の)自己存在を捨て去って³⁶⁾、彼(竜王)の右耳の経路を通して入り、左耳の経路を通して出た。左耳の経路を通して入り、右耳の経路を通して出た。同様にして、右鼻の経路を通して入り、左鼻の経路を通して出た。左鼻の経路を通して入り、右鼻の経路を通して出た。それから、竜王は口を開けた³⁷⁾。長老は口

を通過して入って、腹の中で東に西に³⁸⁾歩き回る³⁹⁾。

113. bhagavā, Moggallāna, Moggallāna*¹, *manasikarohi*, mahiddhiko esa*² nāgo ti āha. thero, mayhaṃ kho, bhante, cattāro iddhipādā bhāvītā bahulikatā yānikatā vatthukatā*³ anuṭṭhitā paricitaṃ susamāradhā, tiṭṭhatu, bhante, Nandopanando, ahaṃ Nandopanandasadisānaṃ nāgarājānaṃ satam pi sahaṃssam pi sataṣaḥssam pi dameyyan ti āha.

*¹ Th-a, Ap-a *omit.* *² Th-a, Ap-a *omit.* *³ Ap-a: vatthukathā.
113. 幸いな方は、「モッガッラーナよ、モッガッラーナよ、気をつけなさい⁴⁰⁾。この竜は強大な神通力を持っている」と言ってきている。長老は、「あなた様、私には四神足が修養され、何度も行なわれ、往訪が行われ、土台が作られ、[計画に]従って実行され、積み重ねられ、うまく着手されているのです⁴¹⁾。あなた様、ナンドーパナンダはともあれ(もちろん)⁴²⁾、私はナンドーパナンダのような竜王を百でも千でも十万でも調伏できます」と言ってきている。

114. nāgarājā cintesi: pavisanto tāva me na ditṭho, nikkhamanakāle dāni naṃ dāḥantare pakkhipitvā saṅkhādissāmī ti cintetvā, nikkhama, bhante, mā maṃ antokucchiyaṃ aparāparam caṅkamanto bādhayitthā ti āha. thero nikkhamitvā bahi aṭṭhāsi. nāgarājā, ayaṃ so ti disvā nāsāvātaṃ*¹ vissajji. thero catutthaṃ jhānaṃ*² samāpajji; lomakūpam pi 'ssa vāto cāletuṃ*³ nāsakkhi. avasesā bhikkhū*⁴ kira *ādito paṭṭhāya sabbapāṭihāriyāni* kātuṃ sakkuṇeyyumaṃ; *imaṃ pana ṭhānaṃ* patvā evaṃ khippanisantiṃ hutvā samāpajjituṃ na sakkhissanti*⁵ ti nesam bhagavā nāgarājadamaṇaṃ nānujāni.

*¹ Cf. 112(*3). *² Th-a, Ap-a: catutthajhānaṃ. *³ Ap-a: chāletuṃ.
*⁴ Ee, Ap-a: avasesabhikkhū. *⁵ Ap-a: nāsakkhissanti.

114. 竜王は思った。

「まずは、入っていくのがわたしには見えなかった。いま、出ていく時に奴を[上下の]歯の間に放り込んで噛み砕いてやろう」と。

[彼はそう]思って、「[君は]出てきなさい、あなた様。腹の中であちらこちらに歩き回って私を苦しめないでください⁴³⁾」と言ってきている。長老は出てきて外に立った。竜王は「奴はこれだ」と見て、鼻風(鼻息)を放った。長老は第四禪に達した。体毛孔すらも⁴⁴⁾、この者に対して風が動かすことはできなかった。伝え聞くところによると、残りの比丘たちは、最初の[奇跡]から始まってすべての奇跡を⁴⁵⁾行うことができるはずだが、しかし、この[鼻息を放つ]状況に⁴⁶⁾至ると、このように急速に捉える(状況把握する)者たち⁴⁷⁾となって、[禪定に]入り込むことはできまい、というわけで、彼らに対して幸いな方は竜王の調伏を承知しなかった。

115. nāgarājā, ahaṃ imassa samaṇassa nāsāvātena lomakūpam pi cāletuṃ nāsakkhiṃ*¹, mahiddhiko samaṇo ti cintesi. thero attabhāvaṃ vijahitvā supaṇṇarūpaṃ abhinimminivā*² supaṇṇavātaṃ*³ dassento nāgarājānaṃ *anubandhi*. nāgarājā taṃ attabhāvaṃ vijahitvā māṇavakavaṇṇaṃ abhinimminivā, bhante, tumhākaṃ saraṇaṃ gacchāmī ti vadanto therassa pāde vandi. thero, satthā, Nanda, āgato, ehi*⁴, gamissāmā ti nāgarājānaṃ damayitvā*⁵ nibbisaṃ*⁶ katvā gahetvā bhagavato santikaṃ agamāsi.

*¹ Ap-a: nāsakkhi. *² Th-a, Ap-a: nimminivā. *³ Ap-a: supaṇṇavātaṃ. *⁴ Th-a: ehi tvaṃ. *⁵ Th-a, Ap-a: dametvā.

*⁶ Th-a, Ap-a: nibbisevaṇaṃ.

115. 竜王は、「わたしはこの沙門に対して鼻息で体毛穴すらも動かすことができなかった⁴⁸⁾。沙門は強大な神通力を持っている⁴⁹⁾」と思った。長老は自己存在を捨て去って、金翅鳥の姿に化けて、金翅鳥の風を見せつけながら竜王をつけ狙った⁵⁰⁾。竜王はその自己存在を捨て去って若いバラモン学生の姿に化けて、「あなた様、貴殿に帰依します」と言いながら、長老の両足に[ひれ伏して]拜んだ。長老は、「ナンダよ、師が来ています。[君は]進み出なさい(来なさい)。行きましょう」と、竜王を調伏して、無毒にさせて、捕まえて、幸いな方のそばに行った。

116. nāgarājā bhagavantaṃ vanditvā, bhante, tumhākaṃ saraṇaṃ gacchāmī ti āha. bhagavā, sukhī hohi, nāgarājā ti vatvā bhikkhusaṅghaparivuto Anāthapiṇḍikassa nivesanaṃ agamāsi, Anāthapiṇḍiko kiṃ bhante atidivā āgatathā ti āha. Moggallānassa ca Nandopanandassa ca saṅgāmo ahoṣī ti. kassa*¹, bhante, jayo, kassa parājayo ti? Moggallānassa jayo, Nandassa parājayo ti. Anāthapiṇḍiko adhivāsetu me, bhante, bhagavā sattāhaṃ *ekapaṭipāṭiyā* bhantaṃ, sattāhaṃ therassa sakkāraṃ karissāmī ti vatvā*² sattāhaṃ Buddhapamukhānaṃ*³ pañcannaṃ bhikkhusatānaṃ mahāsakkāraṃ akāsi.

*¹ Ap-a: kassa pana. *² Ee *omits.* *³ Ee, Ne, Th-a, Ap-a: -ppamukhānaṃ.

116. 竜王は幸いな方にお辞儀して、「あなた様、貴殿に帰依します」と言ってきている。幸いな方は、「竜王よ、[君は]幸あれ(お大事に)⁵¹⁾」と言ってから、比丘僧伽に囲まれて、アナータピンディカの住居に行った。アナータピンディカは、「あなた様、午後になって(予定日時を過ぎて)いらっしゃったのですか」と言ってきている。

「モッガッラーナとナンドーパナンダとの合戦が生じた」と。

「あなた様、誰に勝利が、誰に敗北(相手の打ち負け)がありましたか」と。

「モッガッラーナに勝利が、ナンドーパナンダに敗北が

あった」と。

アナータピンディカは、「私[の施食]を忍受してください、あなた様。幸いな方は7日間連続して⁵²⁾食べものを。7日間、長老に対しておもてなしをいたしましょう」と言ってから、7日間、ブッダを先頭とする500人の比丘たちに対して盛大なおもてなしを行った。

4. おわりに

スリランカの古長老が自説に援用したとされる「ナンドーパナンダの調伏」は、引用を明示する“vuttam h' etam”などの一般的な導入句をもたないためか、これまで研究者の目に留まらず、Vismの源泉資料という視点から考察されることもなかった。

「ある時 (ekasmim samaye)」のフレーズから開始し、在俗信者アナータピンディカによる食事の招待を枠に据え、神通第一の目連と天空を覆う竜王との想像を絶する驚異の対決へと筋を運び、最後にブッダがアナータピンディカに一連の顛末を説き明かして(日常的な場に戻って)締めるという構造は、これが出来上がったひとまとまりの作品であることを伺わせる。Vismの中の1つのエピソード(挿話)とはいえ、それ自体は、切り取られた部分的なエピソードではなく完結した物語であって、それが丸ごとほめ込まれたかたちとなっている。その点で、パーリ註釈文献が他文献を取り上げる際の文章の「引用」とは異なることを注意すべきである。

煙と火による対決場面の描写は、ウルヴェーラカッサパの火堂でのブッダによる竜退治を彷彿とさせる。ところが、こちらは、噴煙・発火のみならず、巨大化して竜王を締め上げたかと思えば、縮小化して竜王の鼻や耳の穴を出入りし、さらに蛇の天敵である金翅鳥に化けて竜王を追い回すというように、畳み掛けるような痛快スペクタクルを演出し、はるかに鮮烈で迫力がある。文章は冗長な繰り返しがなく、全体がよく整えられている。また、パーリ聖典に見られる言い回しを備えるが、語彙や表現には新しい要素も多い。

パーリ註釈文献に挿入されたこの物語が現行パーリ三蔵に含まれない正典外文書であることは確かであるが、次の課題は、それがいつどこで成立し、どの程度の地域的広がりをもって伝承されていたかを考えることであろう。今後、「ナンドーパナンダの調伏」の資料的特徴を明らかにし、こうした問題を慎重に検討していく必要がある。

参考文献

訳注で使用した文献以外のパーリテキストはPTS版(Ee)を底本とし、適宜、ビルマ第六結集版(Be)CD-Rom(VRI版)

を参照した。略号は主にA *Critical Pali Dictionary*, begun by V. Trenckner, ed. by D. Anderson et al., Copenhagen, 1924-に従った。Vismは、HOS版のChapter/Section番号とEeのPage番号を併記した。

長井真琴 1919/1975:「解脱道論と『ヴィスッディマッタ』との対照研究」『哲学雑誌』389 = 『南方所傳佛典の研究』国書刊行会: 220-244.

佐々木閑 1994:「神通力の獲得方法」『禪學研究』72: 1-16.

—— 2005:「神通力の獲得方法・続」『竹貫元勝博士還暦記念論文集 禪とその周辺学の研究』永田文昌堂: 127-136.

定方晟 2011:『インド宇宙論大全』春秋社.

林隆嗣 1997:「アッタサーリニーの著者について—SuttantaṭṭhakathāとĀgamaṭṭhakathā—」『印度學佛教學研究』46, 1: 419-415 (102-106).

—— 2005:「異熟概論(異熟論)—パーリ註釈文献の源泉資料に関連して—」『印度學佛教學研究』53, 2: 898-892 (107-113).

—— 2011:「ヴィーナーの喩え(vinopama)とインド音楽理論—パーリ註釈文献の源泉資料に関連して—」『パーリ学仏教文化学』25: 1-24.

—— 2013:「無礙解道註(Saddhammappakāsinī)の源泉資料について」『印度學佛教學研究』61, 2: 823-816 (236-243).

平川彰 1993:『平川彰著作集第15巻 二百五十戒の研究Ⅱ』春秋社.

水野弘元 1939/1996:「『解脱道論と清浄道論の比較研究』—P.V. Bapat, *Vimutti-magga and Visuddhimagga, a Comparative Study*」『佛教研究』(旧誌)3, 2: 114-137 = 『水野弘元著作選集第一巻 仏教文献研究』春秋社: 143-170.

—— 1934/1997:『南方上座部論書解説』(佛教大学講座) 佛教年鑑社 = 『水野弘元著作選集第三巻 パーリ論書研究』春秋社: 171-453.

村上真実・及川真介 2009:『仏のことは註(二)』春秋社.

森祖道 1984:『パーリ仏教註釈文献の研究』山喜房仏書林.

渡邊照宏 1977:「Adhiṣṭhāna(加持)の文献学的試論」『成田山仏教研究所紀要』2: 1-91.

Adikaram, E.W. 1946/1994: *Early History of Buddhism in Ceylon*. Colombo/Dehiwala.

Bapat, P.V. 1937: *Vimutti-magga and Visuddhi-magga, a Comparative Study*. Poona.

Geiger, Wilhelm 1960: *Culture of Ceylon in Mediaeval Times*. Wiesbaden.

Hayashi, Takatsugu 2011: “On “*Sopākapañhavyākaraṇa*” in the *Visuddhimagga*”, *Buddhist Studies [Bukkyō Kenkyū]*, 39, pp.1-18.

von Hinüber, Oskar 1996/1997: *A Handbook of Pali Literature*, Berlin/New Delhi.

Horner, I.B. 1940/1993: *The Book of the Discipline (Vinaya-Piṭaka)*. Vol. II, London/Oxford.

- Karunadasa Y. 1967/1989: *Buddhist Analysis of Matter*. Colombo/Singapore.
- Lindquist, Sigurd 1935: *Siddhi und Abhiññā: eine Studie über die Klassischen Wunder des Yoga*. Lund.
- Lottermoser, Friedgard 1982: *Quoted Verse Passages in the Works of Buddhaghosa: Contributions toward the Study of the Lost Sīhaḷaṭṭhakathā Literature*. Göttingen.
- Mori, Sodo 1987: "Some Minor Sources for the Pāli Atthakathās— with reference to Lottermoser's study—", *Indological and Buddhist Studies: Volume in Honour of Professor J. Takasaki on his 60th Birthday*. Tokyo: 696-685 (143-154).
- Nagai, Makoto 1919: "The Vimutti-Magga, the 'Way to Deliverance', The Chinese Counterpart of the Pāli Visuddhimagga", *Journal of Pali Text Society*, (1917-1919):69-80.
- [Bhikkhu] Nāṇamoli 1956/1991: *The Path of Purification (Visuddhimagga) by Bhaddantācariya Buddhaghosa*. Colombo/Kandy.

注

- 1) "Quotations in the Visuddhi-Magga from Canonical Books and the Milindapañha" by C.A.F. Rhys Davids (Vism Ee:753-761) 参照。ここでは聖典と Mil だけでなく、Peṭakopadesa、古註釈 "Atthakathā"、古老 "Porāṇā" の引用言及も指摘されている。
- 2) のちに森は Lottermoser が指摘した名称を再検討して、Vism に引用されている Māgandiyasuttuppatti を古註釈として新たに認定した ([Mori 1987])。
- 3) [林 1997] では、共にニカーヤ・阿舎に対する註釈書を指すとみられる Suttantatthakathā と Āgamatthakathā との引用言及事例を調査し、前者を古註釈、後者を現存パーリ註釈であろうと推定した。[林 2005] では、Vipākakathā/Vipākuddhārakathā と呼ばれる古註釈の引用を発見し、その内容構成を明らかにした。[林 2011] では、文献名を伴わない隠れたソース、しかも仏教外のヴェーダ祭式歌詠理論書からの引用例を発見し、[Hayashi 2011] では、Sopākapañhavyākaraṇa という名称の未知の古資料が Vism に引用されている事実を初めて指摘した。[林 2013] では、『無礙解道』のパーリ註釈のなかに古註釈や古説の直接的引用と考えられる事例がないことを検証した。
- 4) 上座部の「外典」については、拙稿「仏典結集で収載されなかった経典—Kulumbasutta と Catuparivattasutta を中心に一」『パーリ学仏教文化学会』第 27 号 (予定)、および拙稿「仏典結集で収載されなかった Rājovādasutta (諫王経)—パーリ註釈文献の源泉資料に関連して—」『印度學佛教學研究』第 62 卷 (予定) 参照。
- 5) パーリ仏教の神通については、[Lindquist 1935][佐々木 1994] 参照。前者は、Vism を中心にヨーガやタントラ文献など幅広い視点で論じた。後者は、神通力の修得にいたる修行過程とそれらの内容に関する Vism の説明を解説した。さらに、[佐々木 2005] は、Vism 以前の南伝・北伝部派の論書を比較し、神通力解釈の伝承系統を考察した。
- 6) adhiṭṭhāna/adhiṣṭhāna の詳細な用例と語義の展開については、[渡邊 1977] 参照。
- 7) 律蔵で使用される術語である hatthapāsa については、[Horner 1940/1943: 18, n.1][平川 1993: 89, 98-99 (n. 36)] 参照。律蔵註によれば、長さの単位である 1 ハッタ (手) は、2.5 ラタナ (肘) に相当する。つまり、「肘までの長さ二つ半」=「片腕を伸ばした所までの距離」。長さの単位については、[Geiger 1960: sec.73] 参照。
- 8) Paṭis II.208-209: ime pi candimasuriye evaṃ-mahiddhike evaṃ-mahānubhāve pāṇinā parāmasati parimajjati ti idha so iddhimā cetovasippatto nisinnako vā nipannako vā candimasuriye āvajjati, āvajjitvā nāṇena adhiṭṭhāti "hatthapāse hotū" ti hatthapāse hoti. so nisinnako vā nipannako vā candimasuriye pāṇinā āmasati parāmasati parimajjati. yathā manussā pakatiyā aniddhimanto kiñcid eva rūpagataṃ hatthapāse āmasanti parāmasanti parimajjanti, evamevaṃ so iddhimā cetovasippatto nisinnako vā nipannako vā candimasuriye pāṇinā āmasati parimajjati.
- 9) 『解脱道論』は聖典に従う。「如是以心行。行已手摸日月。如是神通。如是神力。彼坐禪人有禪人有神通。得心自在。以是修行心入第四禪。安詳出手摸日月。以智受持。此當成近手。彼成近手。彼坐禪人或坐或臥。以手摸捫日月」(T1648, vol.32, 442b24-29)。
- 10) パーリ註釈文献における Cūḷābhaya 長老の言及および他の長老たちとの関係については、PPN および [Adikaram 1946/1994: 83-84][森 1984: 395, no.106] 参照。
- 11) スリランカ史上、彼が Kūtakaṇṇatissa 王の時代 (41~19 BC) に生存していたことは文献的に検証される。PPN および [Adikaram 1946/1994: 83][森 1984: 395, no.107] 参照。
- 12) vītināmeti (caus. of vi-ati-nam) 「(時を) 過ごす」は、パーリ聖典に散発的に用いられる語彙である。Vin I.196, II.286, 300, IV.50-51, MN II.124, AN III.299, Ud 59, Ap II.381, 439, 501. Cf. Mil 91, 216, 406. また、BHSD, s.v. *vyatinamati (caus., -nāmayati) には、Mv と Lv の用例が示されている。
- 13) Vism-mhṭ 「眺めた (olokesi)、ブツダの習性として『一体この者には素地があるかどうか』と [考えて]。』
世尊が一万世界を眺めるという行為 (表現) は、聖典には見られない。むしろ註釈文献に特徴的な叙述スタイルといえる。ここは特に Sv I.279 の表現に類似する。その他の用例は、Sv II.469 = Ps II.180 = Spk I.202 = MNd-a II.384, Sp I.131 = Mp IV.76, cf. Dh-p-a II.37 (II.96, II.132, III.171, III.193, III.232, IV.61), Th-a II.242 にある。
- 14) nāṇamukhe āpātham āgacchati という表現は聖典では珍しく、最後期の Nidd I.178, II.357, II.451 と Paṭis に若干使用されている限りである。Cf. Sv II.682, Ps II.387, Ja-a I.336; Nid-a II.296 = Paṭis-a III.647 (nāṇamukhe ti nāṇābhimukhe)。

- 15) 世尊が機根を探る行為は聖典に見られない。See Sv I.243 = 279, cf. Sv II.366. また、kin nu kho bhavissati という表現は、Dhp-a II.37 (cf. II.96, II.132, III.171, III.193, III.232, IV.61); Th-a II.242 にある。
- 16) āvajjati (および caus., āvajjeti) の聖典的用例は、Vism に繋がる Paṭis 以外には見られない。パーリ註釈期に至ると Ja-a のような説話や認識過程の教理的解説 (āvajjana に関連して) においても広く用いられるようになる。用例については PTC, CPD, DP 参照。
- 17) Vism-mhṭ 「宝の3組における澄清を特徴とする教説の世間的な貫知に関して (彼は) 言ってきている。『心を澄ませせていない (appasanno)』と。邪に見ることから切り離して、心が澄ませられなければならないということが意図されている。それゆえ、(彼は) 言ってきている。『一体、……切り離すことができるだろうか (ko nu kho ... viveceyya)』と。」
- 18) pabhātāya rattiyā という表現は、Mil 90, 91 と註釈文献で用いられるものである。See Ps IV.175, Khp-a 205, 232, Ud-a 307, Sn-a I.80, 193, Th-a II.210, Ap-a 86, 164, Bv-a 18, Ja-a I.217, 267, 330, 334, 335, 500, II.33, 77, 326, III.372.
- 19) saṅgapaṭṭijagganaṃ katvā という表現はもちろんのこと、saṅgapaṭṭijaggana の熟語自体もパーリ註釈文献の用例に限られる。See Sv II.366, 585, 600, Ps II.164, 273, 395, III. 135, V.9, 45, 46, 50, Spk I.233, 257, II.245, 304, 378, Mp I.200, 222, 322, II.126, III.77, 339, Dhp-a I.172, II.96, 133, III.347, Ud-a 308, 354, Sn-a I.267, 271, Pv-a 10, Th-a I.20, II.232, Ap-a 85, 338, Bv-a 290, Ja-a I.330, V.413, VI.62, Paṭis-a III.663.
- 20) devacārika は、SN V. 366-368 の3経題にあるが、経文に現れるのは Ap II.442 (Th-Ap 498.13ab: bhavanā nikkhamitvāna caranto devacārikam) と Bv 62 (15.4ab: yadā buddho atthadassī carati devacārikam) の2例のみで4ニカーヤには馴染みがない。
- 21) Vism-mhṭ 「その日に (taṃ divasaṃ) とは、幸いな方が比丘僧伽に取り巻かれて三十三天の宮殿に向かって行く、その日の区分に。」
- 22) Vism-mhṭ 「飲み会の席を準備していた (āpānabhūmiṃ sajjayimsu) とは、彼が坐っていないながら食事の所作を行う、撒かれ掃き清められたその配食する場所を、食器を近くに運ぶなどして準備していた、手配していた。」
- 23) Vism-mhṭ 「3種のダンサーたちと (tividhanātakehi) とは、花嫁、女兒、未婚娘の衣装をつけた3種の女性ダンサーたちと。」
- 24) upatthāpitam annapānavidhiṃ と類似した表現が、Ja-a VI.289: sabbam annapānavidhiṃ upatthapetvā (食べ物と飲み物の支度をすべて用意して) に見られる。vidhi については、BHSD, s.v. vidhi にある bhojanavidhiṃ ca citrām (Mv I.116) の用例参照。ジャイナ教では、PSM/CCDPL, s.v. annavihi が示すように、世俗の72技芸 (kalā) の1つに調理技術 (the art of preparing food) がある (pānavihi も)。MW, s.v. bhojana-vidhi, m. ‘the ceremony of drinking’ (食事の儀礼作法) とは関係ないと思われる。
- 25) Vism-mhṭ 「眺めながら (olokayamāno) とは、観察しながら、あるいは考察しながら。」
- 26) Vism-mhṭ 「上を次々に (uparūpari) とは、頭上を次々と。宮殿の (bhavanena) とは、宮殿の場所を。」
- 27) Vism-mhṭ 「とぐろで (bhogehi) とは、身体のとぐろによって。下に曲げた (avakujena) とは、下ろし曲げた。とらえて (gahetvā) とは、まるで三十三天の宮殿の場所も残らないように、完全に占拠して。」
- 28) adassana の意味 ‘the not being seen’; ‘disappearance’, ‘invisibility’ については、CPD 参照。
- 29) Vism-mhṭ 「シネールの周壁を (Sineruparibhaṇḍam) とは、シネールの帯を。伝え聞くところによると、シネールのあらゆる方向に、厚さからしても広さからしても5000メートルのサイズの四つの周壁があって、三十三天の宮殿を守るために、竜たち、ガルダたち、クンバンダたち、そして夜叉たちによって支配されている。それらを周壁の状態という一般性によってひとまとめにして『周壁 (sg.)』と述べられている。」
 須弥山の四方を取り囲む持双山 (Yugandhara) を指すと思われるが、説一切有部の世界観とはサイズが異なる。[定方2011: 213]参照。上座部 (Sn-a) の描く世界像は[村上・及川2009: 699]に図示されているが、数値は記載されていない。
- 30) ko nu kho hetu, ko paccayo は、理由を問う正式な聖典表現。DN I.144, 152, II.107, 139, 160, 163; MN I.25, 285, 291, etc. See PTC, s.v. paccaya.
- 31) 直前 (sec.109) で竜王が座から「立ち上がって (utthāya)」一連の行為をなすことが述べられているが、この katvā ṭhito (gerund + sthā) は「～して (しながら) 立つ」([Nānamoli 1956/1991: 395]) ではなく、動作の継続 (Cf. Sa.-Synt., sec.381)。
- 32) Vism-mhṭ 「自己存在を捨て去って (attabhāvaṃ vijahitvā) とは、人間の姿を消し去って。」
- 33) dhūma (m.) の denominative は dhūmayati > dhūmeti (aor. dhūmesi) であるが、この pa-dhūmāsi は dhūmayati > *dhūmāti の aorist 形。HOS, padhūpāsi (= Vin I.24, 25) 「香煙を立てる」は、dhūpa (m) との意味上の混同か (p/m の混同?)。DP, svv. dhūmayati, dhūpayati², dhūpayati 参照。
- 34) Vism-mhṭ 「圧倒する (bādhati) とは、単なる疲労だけを発生させる。」
 ここでは aorist から present に時制が変わり、目連の超能力が竜の神秘力に勝るという一般的事実 (普遍的真理) が語られる。Cf. Ja-a I.360.
- 35) 同様の問いかけ表現は、Sv III.969, Ps II.268, Ja-a III.233 に見られる。また、tvam ko nāmo と名を問う形式もある (Ja-I.460, Dhp-a III.397) (名詞形 nāma として)。

- 36) Vism-mhṭ 「自己存在を捨て去って (attabhāvaṃ vijahitvā) とは、微細な自己存在に化けることによって、竜の姿を捨て去って。」
- 37) Vism-mhṭ 「口を開けた (mukhaṃ vivari)、『口に入った沙門を噛み砕いてやろう』と[思っ]て。」
- 38) Vism-mhṭ 「東に西に (pācīnena ca pacchīmena ca) とは、竜がそのように (東西に) 寝そべっているから、[そう]述べられている。」
- 39) 注 34 とは異なる historical present.
- 40) Vism-mhṭ 「よく注意して[意識を]現出させるために[彼は]言ってくる、『気をつけなさい (manasikarohi)』と。」
- 41) bahulikāṭā yānikāṭā vatthukāṭā anuṭṭhitā paricīṭā susamāradhā は、四神足 (catu-iddhipāda) の説明のための正式な聖典フレーズである (DN II.103, etc.)。説一切有部系では、catvāra ṛddhipāda āsevīṭā bhāvīṭā bahulikṛtāḥ (MPS 15.10 [S204]; Divy 201)。しかし、Mahāvūyutpatti における列挙方式では、āsevīṭā, bhāvīṭā, bahulikṛtā, paricīṭā, (susamāra)ḍḍha; yānikṛtā, vastukṛtā, anuṭṭhīṭā (Mvy 2320, 2321, 2322, 2412, 2414, 2418, 2419, 2420)。
- 42) tiṭṭhatu については、DP, s.v. tiṭṭhati, imper. 'let stand aside, let wait, never mind'.
- 43) それまでの竜王は bhante と呼びかけながらも 2 人称単数の命令形で語るが、ここでは 2 人称複数 (mā ... bādhayittha, aor.) の婉曲的敬語表現で懇願している (戦術として)。
- 44) lomakūpa という語句は、聖典では大人相の説明 (DN II.18, III.144, MN II.136: lomāni lomakūpesu jātāni) と釈尊の苦行場面 (MN I.245: dibbaṃ ojaṃ lomakūpe ajjhohāressāma/-hāreyyuma) に現れるが、「毛穴すらも」という言い回しは聖典には見られない。一方、ジャータカ註には火熱を感じないことを述べる表現として使用されている。Ja-a I.31 (= Bv-a 144, Ap-a 34) では、直前の kesaggamattam pi domanassaṃ na uppajji (髪の毛の先ほどすらも憂いが生じなかった) と対照的に lomakūpamattam pi usumaṃ na gaṇhi (体毛穴ほどすらも熱を受けなかった) と述べる。ただし、少量を指す比喩表現である前者に対し、後者は例示と思われる。その他、Ja-a III.55 (cf. Cp-a 107): sarīre lomakūpamattam pi uṇhaṃ kātuṃ na sakkoti (身体の体毛穴ほどすらも熱くさせられない)、Ja-a VI.330: lomakūpamattam pi uṇhaṃ na gaṇhāti (体毛穴ほどすらも熱を受けない) 参照。一方、kesaggamattam pi (髪の毛の先ほどすらも) という表現は律蔵に出る (Vin III.48, 151)。
- 45) Vism-mhṭ 「最初のから始まってすべての奇跡を (ādito patthāya sabbapāṭihāriyāni) とは、そのとき長老によって行なわれた諸々の奇跡に関して述べられている。」
- 46) Vism-mhṭ 「しかし、この状況に (imaṃ pana thānaṃ) とは、この鼻息を放つ行為に。」
- 47) khippanisanti(n) (Skt. kṣipra-*niśānti) は、聖典では AN に特徴的に現れる熟語で、必ず kusalesu dhammesu を伴う (AN II.97-98, III.201, IV.296-298, 328-331)。これらの経には、いずれも対応する漢訳阿含 (およびインド語系写本断片) が存在しない。BHSD に挙げられず、Mvy 1247, 1248 に kṣiprābhijñā (cf. DN III.106) があるが、-nisanti の対応語句の存在は不明。上座部 (パーリ仏教) 特有の語彙の可能性。Vism では、同じ章 (xii.8-9) で検討されており、神通力を得ても、瞬時の対応は 100 人や 1000 人に一人しか達することができない能力とされる。
- 48) sec.114 では vāto cāletuṃ nāsakkhi だが、ここでは ahaṃ -vātena cāletuṃ nāsakkhi と動作主が変わる。
- 49) 関連するフレーズとして、ブツダの竜退治における mahidhiko (kho) mahāsamaṇo mahānubhāvo (Vin I.25) 参照。
- 50) Vism-mhṭ 「つけ狙った (anubandhi) とは、『このように強大な神通力を持ったこの沙門に反撃することはできない』と、怯えて逃げるのをつけ狙った。」
煙対煙、光熱対光熱と同様、鼻息に対抗する翼風。
- 51) sukhī hotu/hohi (安楽な者となれ) の表現は、パーリ文献の用例をみると、①改心した相手に対する赦しの言葉 (DN I.108, SN I.210, Ja III.329)、②礼拝や贈り物に対する返答の言葉 (DN II.271, Ja III.494, 495, Vism i.106, 107 [Ee 39])、③無事息災を祈る慈悲の言葉 (Ja III.186, V.160, Vism ix.11 [Ee 297]) として使用されている。
- 52) Vism-mhṭ 「連続して (ekapaṭipāṭiyā) とは、一列に、間断なくという意味。」
- 【付言】 この「ナンドーパナンダの調伏」は、Sārasaṅgaha 第 39 章 (pp.289-292) にも同じ文章で再録されているが、後代 (13 世紀末か 14 世紀前半) の教理的アンソロジーであるため本稿では扱わなかった。浪花宣明『サーラサンガハの研究』平楽寺書店、1998、486-489 参照。